

戸田義雄先生の宗教学

鎌田 東二

戸田義雄先生は、平成18年（2006年）7月24日午前7時50分、脳梗塞により静岡県熱海市西熱海町の自宅で亡くなられた。享年88歳だった。菩提寺は東京都品川区東五反田の了真寺（曹洞宗）で、墓碑には先生が生涯敬仰しつづけた聖徳太子の『勝鬘經義疏』から採った「慈心與樂 悲心抜苦」の句が刻まれている。

私は戸田義雄先生の國學院大學における最後の弟子になる。戸田先生に修士論文を提出し指導を受けた最後の学年の最後の学生になるからである。私の同期に現在神社本庁教学研究部長の大井鋼悦君がいるが、彼と私が戸田先生（以下敬称略）の論文指導を受けた最後の大学院生であった。

戸田義雄は、大正7年（1918年）6月1日、東京に生まれた。旧制新潟高校文科甲類を出た後、東京帝国大学文学部宗教学宗教史学科に入学し、卒業。昭和18年（1943年）に提出した卒業論文は「聖浄二門の宗教論争」と題した。同大学大学院修了後3年間副手・助手を務め、その後日本経済短期大学教授、國學院大學教授、同大学日本文化研究所所員教授（後に同研究所名誉所員）の他、東京大学、お茶の水女子大学、青山学院大学、大正大学などの非常勤講師を歴任した。

昭和35年（1960年）10月21日、「日本宗教思想史の一考察」により國學院大學より文学博士号を授与される（第53号）。昭和36年か

ら38年にかけてロックフェラー財団在外研究員として、ハワイ大学東西センター・アメリカ言語研究所、ハーヴァード大学、ミシガン大学、ケニヨン大学に所属した。また、長らく神社本庁教学顧問や日本会議顧問を務め、神社神道や教派神道を含め神道全般への宗教学的理解に基づく提言を行ない、寄与するところ大だった。

著書には、『日本の感性』（日本教文社、1974年）、『民族と文化の発見』（内野吾郎との共編著、大明堂、1978年）、『日本人と賛美歌』（永藤武との共編著、桜楓社、1978年）、『よみがえる三島由紀夫——霊の人の文学と武と』（永藤武との共著、日本教文社、1978年）、『宗教と言語』（大明堂、1979年）、『実存心身医学入門——医学と哲学を結ぶ』（高島博との共著、丸善、1981年）、『日本カトリシズムと文学——井上洋治・遠藤周作・高橋たか子』（編著、大明堂、1982年）、『隠れた信仰次元——日本キリスト者の底流』（編著、大明堂、1986年）、『宗教の世界』（大明堂、1986年）、『祖国と人類の悲願 諸民族の聖魂』（国民文化研究会、1992年）、『日本の感性』（PHP文庫、PHP研究所、1994年）などがあり、学術論文・エッセイも多数発表している。

戸田義雄の指導を受けた者は神社界や教育界などにも数多いが、研究者としては、永藤武（故人、元青山学院大学教授）、松井嘉和（大阪国際大学教授）、佐藤健二（東邦中学

・高等学校教頭)、岩切信一郎(東京文化短期大学教授)、大井鋼悦(神社本庁教学研究部長)、鎌田東二(京都造形芸術大学教授)らがいる。

戸田義雄の宗教研究は、第一に宗教的人間の研究、第二に宗教言語の研究、第三に宗教文学の研究、第四に宗教の創造的世界の研究、第五に神社神道の研究、第六に日本におけるキリスト教の研究、第七に日本文化の研究、第八に宗教と医学・医療との関係の研究に大別できる。

宗教的人間の研究として挙げるべきは、聖徳太子と親鸞についての研究である。戸田義雄は旧制新潟高校時代に倉田百三の『出家とその弟子』を読んで心を動かされ、中国哲学者の山下政治の指導で、黒神正一郎著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の輪読会を毎週行なうことになった。この輪読会が母体となり、同信団体「信和会」が結成され、合宿所として「信和寮」が建てられたのだが、その初代寮長を務めている。そこで戸田の宗教と宗教的人間と宗教思想への関心が練り上げられてゆく。

昭和18年に戸田義雄は卒業論文『聖浄二門の宗教論争』を提出したが、これは法然の『選択本願念仏集』とその批判書、とりわけ明恵の『摧邪輪』を比較検討することで聖浄二門の宗教論争を分析・考察するものであった。そして、この法然と明恵の宗教論争が親鸞の名著『教行信証』に結実し、そこで決着を見た結論づけた。戸田義雄は親鸞の転機となった六角堂での百日間の参籠において、九十五日目に聖徳太子の無告を得、それに促されて法然の念仏門に入ったことを重視する。戸田は親鸞が観音信仰の拠点であった六角堂に参籠したのは、観音信仰よりもむしろ観音の化身とされた聖徳太子信仰があったからだと考えている。戸田は、『日本の感性』の中で、

梅原猛の『隠された十字架—法隆寺論』を批判し、聖徳太子の霊は「怨霊」としてではなく、「太子の霊は、その尽きせぬ大乘解脱の悲願として吾々に生きる」と主張し、その論考を「聖徳太子—親鸞の信仰系譜は真に『大和国』にはじまり、『国を和ます』という二重の意味での『和国の教え』、その教え主たる『和国の教主』につらなるものなのである。それが私の生活の支えになっているところから、私に生きる仏教はこれだと申し上げるのである」と結んでいる。おそらく、この結論は旧制新潟高校生時代からの戸田義雄の強烈な信念だったと思われる。そしてその「和国の教主」への讃仰と「和国の教え」から神社神道や神道一般への関心と共感が生まれてきたといえるのではないか。

戸田の宗教言語研究の要諦は、「言いし事が成る」、「言葉の成就」(『宗教と言語』68, 79頁)というキーワードに集約されるが、まさに聖徳太子の「言いし事」が親鸞において「成る」という信仰系譜を戸田は読み取るのである。このような独自の読みは、戸田義雄自身の宗教研究の動機と研鑽の深奥から生まれてくるものであろう。そのように見れば、戸田義雄の墓碑に聖徳太子の『勝鬘經義疏』から採った「慈心與樂 悲心抜苦」の句が刻まれたのも戸田の信念の一途さと一貫性を示すものと見なすことができる。聖徳太子—親鸞の信仰系譜に「大乘解脱の悲願」を仰ぎ見た戸田は、自分自身をその信仰系譜の末裔に位置づけ、心中密かに覚悟し自負していたのである。

当然のことながら、そのことは戸田義雄の神道理解にも反映される。戸田は「神道」について一般的な叙述を二度試みている。一つは、仁戸田六三郎監修『現代宗教思想のエッセンス—世界20大宗教の本質と展望』(ペリかん社、1969年)の中で、第一章に該当す

る部分「1 神道」を執筆担当し、それを「神社神道」と「教派神道」の二つに分けて書いているもの。もう一つは、堀一郎編『日本の宗教』（大明堂、1985年）の中で、「二 神道——その形成と展開前史」を執筆担当したものである。

前者の論考では、「美的感覚の文化」（M・H・ルロン神父の言葉）としての「神道的多神教」の内実を分析し、丸山真男が『日本の思想』（岩波新書）で、「無限抱擁制」と「思想的雑居性」を特徴とし「実質的思想を備えない無構造の伝統の原型」とした神道理解を批判的に吟味しつつ、神道が「人に対する教えを体系化した思想」ではなく「人を教えるの必要なしとした思想」とであると対置し、「神社神道」を「日本語でいう『神』と人との融一を中核とする生活活動」と宗教学的に定義し、さらに比較宗教論的に、「向日葵型＝他力依存型式の救済宗教」と「月見草型＝自力直立型」の二類型の中では、ユダヤ教やキリスト教や回教と同様に「向日葵型」に属するが、これら三宗教が「啓示型」であるのに対して、「日本語『神』のしろしめすままに、神の御業に随順するを本旨とする性格から『神ながらの道』とも呼ばれるほどに『他力的』」であるが、加えて「神代や原初期の伝説、古譚と直属し、遠い過去の祖型を繰り返す営み」としての「言依型」とであると位置づけている。「神社神道」は「古習としての祭式の厳修にあり、一見『儀礼宗教』『慣行宗教』の色彩を濃くして来た」「日本民族の共同体的慣行」であるが、それに対して「教派神道」は「教祖」や「組織者」が「その基盤たる民族宗教＝神道から何物かを抽出し、新たに表象し、組織化を試みた」ものであるとする。

後者の論考では、仏教との対置の中で成立してきた「神道」という語を分析するところ

から始まり、神道と仏教との関わりが「求心の形態」として現われ出たものが「神仏習合」で、「遠心的形態」として確立してきたのが「神本仏迹節」（神を本地とし仏を垂迹とする反本地垂迹説）であるとし、論の大半を聖徳太子の事績（国史編纂、天神祭祀、神祇信仰、外交文書、国号）の考察に費やし、「国号の尊重、国史の編纂、冠位十二階、十七条憲法の制定、対外治政にみせられた天皇観、国家観の宣明、仏教興隆とその日本化等、太子の数々の業績は、この神祇祭祀、神道の尊信と相即するのである」と結論づけている。今日の学問的論議からすればその天皇観などに修正・再考の必要があるかと思われるが、ともあれ、聖徳太子と神道との相即的關係を実に丹念かつ情熱的に論じているのである。このあたりにも戸田義雄の神道論の大きな特徴が見出せる。これに先立つ論考『日本の心——民族の原点』（総論 離島日本の動態的文化）（日本思想研究会編、国文社、1970年）において、戸田は夙に「ユーラシア大陸との間の適度の距離は、日本的なるものの原始性を自覚せしめ、古いものに執着する性質を生む一方、外国のもつ新事実に対する新鮮な感激をも生んだ。古い日本的なるものと、これに接触する新事実に対し、それを舶来として柔和に対処する態度を生んだ。これは、孤立しながら、然も完全な孤立におちいらず、国際的斗争を摩擦としてとらえることなく、文化の輸入を文化間の生存競争としておさえるのでなく、常に、より豊かに、より統一に入る『融一の原理』に帰属せしめたからであつた。／六世紀後半から七世紀初頭にかけて摂政の地位にあられた聖徳太子の、外来宗教としての仏教に対する摂取の態度、徳川期における本居宣長の日本的なるものの発見のための国語学、文芸学上の諸労作は、すべて、こうした日本人の文化移植に対する認識に発し

ており、この認識自体、日本の独創であると云わねばならぬ位である。」と述べているのも、同様の認識に基づくものである。

以上のような、仏教と神道との関係の考察もさることながら、もう一つ、特筆しておかなければならないのは、神道および日本文化とキリスト教との関係についても比較宗教学的・比較文化論的な新視点を提示した点である。前掲『民族と文化の発見』中の「諸民族の精魂」や『隠れた信仰次元』中の「キリスト教と日本文化の文化内開花」や『日本カトリシズムと文学』などで戸田は、繰り返し比較の観点を取り込みながら自国文化の自己認識にそれこそ「精魂」を傾けている。残念ながら紙幅を超過してしまったので詳しく紹介することはできないが、戸田義雄自身の言葉を借りれば、「身を受けて知る」という「体験的味識・理解」に情熱と思索を傾けているのである。

戸田義雄の宗教学は「身を受けて知る体験的味識」の宗教学であったといつも思っていた。戸田義雄のそのような真摯な探究の姿勢は、最後の弟子として側から見ていて、教育者としても研究者としても一個の人間としても、深甚の尊敬と親愛の念を抱かざるを得ない。とりわけ亡くなる数年前に、わざわざ奥様と二人で私の住む埼玉県大宮まで激励に来てくださり、御自身で宿を取られ、一夜私たち夫婦と語り明かしてくださったその師恩に対しては、想い出す度に感謝の念とともにこみ上げて来るものを禁じえない。戸田先生の御冥福を心から祈るとともに、後に残された者の務めを及ばずながら果たしていきたい。